

大月・上野原の古墳

大月・上野原地域を流れる桂川流域には、今から1,400年ほど前に造られた古墳が点在します。古墳は当時この地域に住んだ有力者のお墓です。発掘調査された上野原市西ノ原古墳②⑥や副葬品が知られている大月市強瀬子の神古墳④⑧では、遺骸をおさめた石室の形が、相模（現在の神奈川県）や武蔵



西ノ原古墳
(上野原市教育委員会：提供)



強瀬子の神古墳



強瀬子の神古墳出土の直刀

（現在の東京都・埼玉県）地域の古墳とよく似ており、強いつながりがあったことがわかります。他にも大月市の鳥沢金山古墳③⑧、宮谷古墳などの古墳があり、複数の力をもった有力者が、この地域のあちこちで暮らしていたことを想像することができます。

大月・上野原の古代

大月市や上野原市を含む桂川流域は、古墳時代からの武蔵・相模地域とのつながりが、古代においても続いていました。奈良時代には武蔵国の須恵器が持ち込まれ、相模型と呼ばれる土師器が作られていました。『日本後紀』には、八世紀の終わりに朝廷が使者を使わし、甲斐・相模両国の国境論争を裁定したという記事があります。記事には判読不能な箇所があり、不明な点もありますが、両国の境界には大きく二つの説があります。そのうちの一つは、境界を上野原市と神奈川県相模原市緑区（旧津久井郡藤野町）に置く説で、これは現在の県境とほぼ重なります。この頃から郡内地域へ甲斐国府の力が浸透し、文化・産業面での交流が活発になったと思われます。



上野原市の古代土器
(上野原市教育委員会：提供)

その証拠として九世紀以降、甲府盆地で作られた「甲斐型土器」が郡内地域や相模にも多く流通するようになりました。甲斐型土器は甲斐国で生産された特有の土師器で、坏を中心に、皿、甕などがあります。甲斐国のみでなく、駿河や信濃などの周辺地域や、平城京（奈良）でも出土しています。